宮本百合子選集

1

貧しき人々の群

・

他十二篇

宮本百合子選集

1

貧しき人々の群 他

第3回配本

昭和三十一年七月十五日 印刷
昭和三十一年七月二十日 發行

定價二五〇圓
地方價 二六〇圓

著者 宮本百合子

發行者 河出孝雄
東京都千代田區神田小川町三ノ八

印刷者 山元正宜
東京都文京區柳町二六

發行所 株式會社 河出書房
東京都千代田區神田小川町三ノ八
振替口座東京一〇八〇二番
電話(29)三七二一番(代表)

印刷・三晃印刷KK　製本・美行製本所

目次

貧しき人々の群……三
禰宜様宮田……六一
一つの芽生……九七
三郎爺……一一
風に乘つて來るコロポックル……一三五
澁谷家の始祖……一五三
加護……二一四
我に叛く……三一九

南　路……二五七
午　市……二八八
黄　昏……二九六
光のない朝……三一〇
古き小畫……三一五
解　題……三七九

貧しき人々の群　他十二篇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

貧しき人々の群

序にかへて

C先生。

先生は、あの「小さき泉」の中の、

「師よ、師よ
　何度倒れるまで
　起き上らねばなりませんか？
　七度までですか？」

といふ、弟子の問に對して答へた、師の言葉を御覺えでございますか？

「否！
　七を七十乘した程倒れても
　なほ汝は起き上らねばならぬ」

といはれて、起き上り得る弟子の尊さを、この頃私は、しみじみ感じてをります。

第一、先づ倒れ得る者は強うございます。

倒れるところまで、グン、グンと行きぬける力を、私はどんなに立派な、また有難いものだと思つてゐることでございませう。

今度倒れたら、今度こそ、もうこれつきり死んでしまふかもしれない。

が、行かずにはゐられない。行かずにはすまされない心。

ほんたうにドシドシと、

ほんたうにドシドシドシドシと、眞の「自分の足」で歩き、眞の「自分の體」で倒れ、また自ら起き上られる者の偉さは、限りなく畏るべきものではございますまいか。

まだ心の練れてゐない、臆病な私は、もしや自分が、萬一倒れるかもしれないことを怖がつて、一尺の歩幅で行くところを、八寸にも七寸にも縮めて、ウジウジと意氣地なく、探り足をしいしい歩きはしまいかといふことを、どれ位恐れてゐるでございませう。

私は、もう二足踏み出してをります。その踏み方は、やがて三度目を出さうとしてゐる今の私にとつては、決して心の踊るやうに嬉しいものではございませず、またもとより滿足なものでは勿論ございません。

けれども、どうでも歩き廻らずにはゐられない何かが、自分の裡に生きてゐるのでございます。

たとへよし、いかほど笑はれやうが、くさされやうが、私は私の道を、ただ一生懸命に、命の限り進んで行くほかないのでございます。

自分の卑小なことと自分の弱いことに、いつもいつも苦しんでばかりゐる私は、一體何度倒れなければならないのか？

それは解らないことでございます。

けれども、私はどうぞして倒れ得る者になりたうございます。地響を立てて倒れ得る者になりたうございます。そして、たとへどんなに傷はついても、また何か摑んで起き上り、あの廣い、あの窮りない大空を仰いで、心から微笑出來ましたとき！　その時こそどうぞ先生も、御一緒に心からうなづいて下さいませ。

一九一七年三月十七日　著者

一

村の南北に通じる往還に沿つて、一軒の農家がある。人間の住居といふよりも、むしろ何かの巣といつた方が、よほど適當してゐるほど穢い家の中は、窓が少いので非常に暗い。

三坪ほどの土間には、家中の雜具が散らかつて、梁の上の暑さうな鳥屋では、産褥にゐる牝鷄のクククククと喉を鳴らしてゐるのが聞える。

壁際に下つてゐる鷄用の丸木枝の階子の、糞や拔け毛の白く黄色くついた段々には、痩せた雄鷄がちよいと止まつて、天井の牝鷄の番をしてゐる。

すべてのものが、むさ苦しく、臭く貧しいうちに、三人の男の子が爐邊に集つて、自分等の食物が煮えるのを、今か今かと、待ちくたびれてゐる。

或る者は、頭の下に敷いた一方の手を延して、燃えかけの枝で、とろくなつた火を掻きまはして、溜息を吐く。或る者は、さも待遠さうに細い足をバタバタ動かしながら、まだ湯氣さへも上らない鍋の中と、兄弟共の顏を、盜み視てゐる。けれども誰一人口をきく者はなく、皆この上ない熱心さで粗野な瞳を輝かせながら、ただ目前に煮えようとしてゐる薯のことばつかりを考へてゐるのである。

逞しい想像力で、やがて自分等の食ふべきものの、色、形、臭ひを想ふと、彼等の眠つてゐた唾腺は、急に呼びさまされて、忽ち舌の根にはジクジクと唾が湧き出し、頰ぺたの下の方が、泣きたいほど痛くなる。彼等は、頭が痛いやうな思ひをしながら、折々ゴクリ、ゴクリと喉を鳴らし合つてゐた。

子供等は年中腹を空かしてゐる。腹が張るといふことを曾てちつとも知らない彼等は、明けても暮れても「食ひたい食ひたい」といふ欲にばつかり攻められて、食物のことになると、自分等の本性を失つてがつがつする。

今も彼等三人が三人、皆同じやうに「若し俺ら獨りで、こんだけの薯が食へたらなあ」と思ひ、いつもはゐなければならない兄弟共も、こんなときには何といふ邪魔になることかと、しみじみと感じてゐたのである。それだもん

で、いつの間にか鷄共が俵の破れから嘴を突込んで、常に親父から、一粒でももつたいなくすると目が潰れるぞと、かたく戒められてゐる米粒を、拾ひ食ひしてゐるのなどに、氣のつかう筈はなかつた。

鷄共と子供達とは、てんでに自分等の食物のことばかりに氣を奪はれてゐたのである。

ところへさつきから入口の所で、ジイッとこの樣子を眺めてゐた野良犬が、何を思つたか、いきなり恐ろしい勢ひで磔のやうに、鷄の群へ躍り込んだ。

珍らしい米の味に現をぬかしてゐた鷄共は、この意外な敵の來襲に、どのくらゐ度膽をぬかれたことだらう！ コケーッコッコッコッコッ、コケーッコッコッコッコッコッといふ耳を刺すやうな悲鳴、バタバタバタバタと空しく羽叩きをする響などが、家中の空氣を動搖させ、靜まつてゐた塵は、一杯に飛び擴がつた。

あまり騷動が激しいので、かへつて犬の方がまごついてしまつて、濡れた鼻で地面をこすりながら、ウロウロとそこいら中を、嗅ぎまはつた。

横に垂れ下つた舌や、薄い皮の中から見えてゐる肋骨が、ブルブル震へたり、喘いだりしてゐるのである。

この不意の出來事に、子供等は皆立ち上つた。そして、一番年上の子は、火の盛に燃えついてゐる木株を爐から持ち上げるや否や、犬を目がけて、力一杯投げつけた。投げられた木株はヘラヘラ焰をはきながら、犬の後足の直ぐのところに、大きな音と火花を散らして轉げたので、低い驚きの叫びを上げながら、犬は體を長く延して、一飛びに戸外へ逃げ去つてしまつた。

木株の火は消えて、フーフーと、激しい煙が立ちはじめた。

この小さい騷ぎを挾んで、彼等の待遠い時は、極めてのろのろと這つて行つた。

けれども、やうやう鍋の中から、グツグツといふ嬉しい音がし始めると、皆の顏は急に明るくなり、微笑した眼が幾度も幾度も蓋を上げては、覗き込んだ。

これから暫くすると、一番の兄は、まだ朝の食物があつちこつちにこびりついてゐる椀を持つて來て、爐の邊に並べた。これから、このホコホコと心を有頂天にさせるやうな香りのする薯が分けられようといふのである。

一つ二つ三つ四つ。一つ二つ三つ四つ。

彼は順ぐりに分けてゐたが、不意に、前後を忘却させたほど強い衝動的な誘惑にかられて、皆の顏をチラッと見ると、弟達のへ一つ入れる間に、非常な速さで自分の椀に一つだけよけい投げ込んだ。そして、何氣なく次の一順を廻り始めようとしたとき、

「兄にい、俺らにもよ」

と、そのときもらふ番の弟が、強情な聲で叫んだ。後の者も、眞似をして椀をつきつけながら、兄に迫つて行つた。兄は、自分の失敗の腹立たしさに、口惜しさうな顏をしな

がら、突き出された椀の中に、小さい一切れをまた投げ込んでやつた。けれども、初めに見つけたすぐ下の子は、兄のと自分のとを、しげしげ見くらべてゐた後、

「俺ら厭んだあ！　お前の方が太つてらあ」

と云ふなり、矢庭に箸をのばして、兄の椀からその太つた丸いのを、突き刺さうとした。

物も云はせず、その子供の顏は、兄の平手で、三つ四つ續けさまにぶたれた。彼は火のつくやうに泣き出した。そして、齒をむき出し、拳骨をかためて「薯ら一つよけいに食ふべえと思つた奴」にかかつて行つた。

それから暫くの間は、三人が三巴になつて、泣いたり喚いたりしながら、打つたり蹴つたりの大喧嘩が續いた。しまひには、何のために、どうしようとしてこんなに大騒ぎをしてゐるのかも忘れてしまつたほど、猛り立つてつかみ合つたけれども、だんだん疲れて來ると共に、殴り合ひもいやになつて來た。氣拔けのしたやうな風をしながら、めいめいが勝手な所に立つて、互ひに極りの悪いやうな、けれどもまだ負けたんぢやねえぞと威張り合ひながら、いつの間にかこぼれて、潰れたり灰にころがり込んだりしてゐる大切な薯を見つめてゐた。

皆、早く食べたい、拾ひたいと思つてはゐるのだけれど、思ひきつて手を出しかねてゐると、喧嘩を始めたなかの子が、押しつけたやうな小聲で、

「俺ら食ふべ」

とこぼれたものを、拾ひ始めた。

これを機に、ほかの者も大急ぎで拾つた。

そして、また更めて數をしらべ合ふと、今はもうすつかり氣が和らいで、かけがへのない一椀の寶物を出來るだけゆるゆると、しやぶり始めたのである。

これは、町に地主を持つて、その持畑に働いてゐる、甚助といふ小作男の家の出來事である。

二

ちやうどそのとき、私は甚助の小屋裏の畑地に出てゐた。ブラブラ歩いてそこまで來ると、思ひがけず子供等の樣子が目についたので、傍の木蔭から非常な興味を持つて、眺めてゐた。そして薯のことから、喧嘩からすつかりを見てしまつたのである。初めの間は、私はただ厭なものだ、あさましいものだと思つてゐたけれども、だんだん恐ろしいやうになり、次で、たまらなく可哀さうになつて來た。彼等に對して一切れの薯は、どれほど勢力を持つてゐるものか。若し私に出來ることならうんと厭になるほど御馳走を食べさせて遣りたいといふやうな心持も起つたけれども、たうとう、私はどうしてもあの子供等と近づきになつてみようといふ激しい好奇心に、すつかり打ち負かされてしまつた。

私は、さつさと獨りで入つて行かうともしたが、何だかばつが悪い。

向うがいくら子供達でも、何だか極りが悪い。で、私は誰か來て私を連れてつてくれればと思ひながらぼんやりと立つてゐた。裏口からは、子供達が口の中で罎をころがしたり、互ひの椀の中を覗き合つたりしてゐるのがすつかり見える。

ちやうど好い鹽梅に、そのとき甚助の身内の者で、家が傍だもんで、日に一度づつ子供ばかりで留守居をしてゐる所を見廻つてゐる婆が、いつものやうに、手拭地のチャンチャン一枚で向うから來た。

私は早速婆にたのんだ。そして、初めて甚助の家へ入つてみたのである。そこいら中は思つたより穢く臭かつた。

私が戸口の所に立つて、内の様子を眺めてゐると、婆は、けげんな顏をしてジロジロ私の方ばかり見てゐる子供達に、元氣の好い聲でいろいろ世話を燒いてやつてゐる。

「ちやんは今日も野良さ行つたんけ？　おとなしく留守をしてろよ。また鐵砲玉（駄菓子）買つてくれつかんな」

そして默り返つたまま、婆が何と云はうが返事をしようともしない子供達に、何か云はせようとしきりに骨を折つても、頑固な彼等はただ、臆面のない凝視をつづけてゐるばかりで一言も口をあかうともしない。皆が、憎いやうな眼をして私ばかり見てゐるので、だんだん私は來ちやあ悪かつたのかしらんといふやうな心持ちになつて來た。

婆は、しきりに氣の毒がつてかれこれとなしにかかつても、子供等は一向そんなことには頓着なく婆がいはゆる「せうし（恥し）がつてゐますんだ」といふ沈默を續けてゐる。

私には、なぜ子供等がこんなに默り返つてゐるのかいつかう譯が分らなかつた。それで、幾分蹴落されるやうな心持ちになりながらも、しひて微笑をしながら、

「父さんや母さんは？　淋しいだらう？」

と、一番大きい子にいふと、いつの間にか私の後に廻つてゐた中の子が耳の裂けさうな聲で、

「ワーッ！」

とはやし立てた。

私は非常に驚いたと同時に、胸がムカムカするほど不愉快を感じた。けれども、もう一度私は繰返してみた。

「淋しいだらうね、だあれもゐないで」

腹は立つたけれども、私にはまだ彼等を憫むくらゐの餘裕はあつた。年中貧しい暮しをして、みじめに育つてゐる子に、優しい言葉の一つもかけてやりたかつたのだ。が、それにも拘らず、

「おめえの世話にはなんねえぞーッ」

といふ、思ひがけない怒罵の聲が、私の魂を動顛させる鋭さで投げつけられたのである。

私は目の奥がクラクラするやうに感じた。

一瞬間に、今まであつた總てのことが皆嘘だつたやうな氣もする。

私は、何をどうすることも出來ずにただ立つてゐた。け

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

れども、心が少し靜まると、ヂイッとしてゐられないほどに不可解な憤怒や羞恥が激しく湧き立つて、非常に不調和な感情の騷亂は、肉體的の痛みのやうに、苦しい心持ちにさせるのであつた。

私は寛容でなければならない。彼等から一歩立ちまさつた者の持つ落着きを保ちつづけようとする虚榮心が臆病になりきつた心を鞭撻した。けれども空虚になつたやうな頭には何を判斷する力もなくなり、齒がガチガチと鳴つてゐる。

この意外な有樣に、婆はすつかりとちつてしまつた。そして子供の手をグングン引つぱつて下に坐らせながら私には、詫びるやうな眼差しで、

「行きますつぺなあ、おめえ樣。禮儀もなんも知んねえで、はあどうも」

と立ち上つた。私も、もう歸るだけだと思つた。

婆の先に立つて子供等に背を向けたとき、私は自分の上に注がれてゐる憎しみに滿ちた眼を思ひ、野獸のやうな彼等の前に、どれほど私は臆病に弱く醜く立ち去らうとしてゐるのかと思ふと、このまま消え失せてしまひたいほどの恥しさに、火のやうな涙が瞼一杯にさしぐんで來たのである。

私はしほしほと杉並木の路を歩いてゐた。誰に顏を見られるのも、口を利かれるのも堪らない心持ちでのろのろと足を運んでゐると、いきなり後から唸りを立てて飛んで來た小石が、私の足元で彈んで、コロコロと傍の草中へ轉がり込んでしまつた。

シュウといふ音が鼓膜を打つや否や、私は反動的に身をねぢ向けて見ると、まだすぐ近くの甚助の家の前に、子供等がひしめき合つて立つてゐる。

年上の子供は、私が振向くと、手に持つてゐた小石を振り上げて、威すやうに身振りをした。

私は、子供等の方を見ながらのろのろと杉の木蔭へ身を引きそばめて、二度目の襲擊を防がうとした。

私は、手觸りの荒い杉の太い幹につかまりながら、譯もなく大きな涙をボロボロとこぼしたのである。

三

「何といふことだ！」

あのときの樣子を思ひ出すと、私の顏はひとりでに眞赤になつた。なぜ私は、あれほどの恥辱を受けなければならなかつたか？　私が彼等に對していつたことが惡かつたか？　私は確かに惡いことはいはなかつたといふよりほかはない。私は同情してゐたのだ。ほんたうに淋しいんだらうにと思つてゐたばかりだ。私にはちつとも嘘の心持ちはなかつた。どこからどこまでも正直な氣持ちでゐたのではないか？　私にはどうしても彼等の心持ちが解せない。それ故あの罵りに對しての憤りはより強く深くなるばかりなのであつた。私は、お前方から指一本指される身ぢやあな

い。人が親切に云つてやつたのに石までぶつけて、それで濟むことなのか？

私はほんとにあの子供達が厭であつた。そして、またいつものやうにあのときのことがおき村の噂に上つて、小つぽけなをかしい自分が、泥だらけの百姓共の嘲笑の種に引つぱりまはされるのかと思ふと、一思ひに、あのこともあの子供達も一まとめにして、押し潰してしまひたいほどの心持ちがしたのである。御飯も食べられないほど私はくさくさした。

けれども、夕方近くなつて、小作男の仁太といふのが來て二時間近くも話して行つたことは、私に或る考への緒口を與へた。

彼は、私共の持畑——二里ほど先の村にある——に働いてゐる貧しい小作男で、その男が來ればきつと願ひ事を持つてゐないことはないといはれてゐるほど、困つてゐるのである。

私は彼の衰へた體をながめ、もう何も彼も運だとあきらめてゐるよりほかしやうのないやうな話振りを聞くと、フト甚助のことを思ひ出した。甚助はやはりこの仁太のやうな小作男だ。

ああ、ほんとに彼等はこんな氣の毒な小作男の子供達であつたのだ！　この思ひつきはだんだん私の心から種々の憤りやなにかを持ち去つてしまつた。

けれども、後にはよく考えなければならない、悲しい思ひが深く根ざしたのである。

あの男の子等は、今まで、その兩親が誰のために働いてゐるのを見てゐたのか？

彼等の收穫を待ちかねて、何の思ひ遣りも、容赦もなく米の俵を運び去つてしまふのは如何なる人種であるのか？

實世間のことを少しづつ見聞して、大人の生活が分りかけて來た彼等男の子等の胸は、兩親に對する同情と、常に自分等よりもずつとよけいな衣類や食物を持つてゐて、異つた樣子をし異つた言葉で話す者共へ對しての憎悪と猜疑で充ち滿ちてゐたのであらう。

俺らが大事の兩親に辛い思ひをさせ、涙をこぼさせるのは、あのいつでもその耳觸りの好い聲を出して、スベスベした着物を着て、多勢の者にチヤホヤいはれてゐる者共ではないか？

親切らしい言葉の裏には伏兵のあることを、いつとはなく半分直覺的に注入され、「町の人あ油斷がなんねえぞ」と云はれ云はれしてゐる彼等であらうもの、いきなり私が現はれて、優しい言葉をかけたからとて私を信じ得る筈はない。

彼等の頭には先づ第一に辟みが閃いた。

「またうめえこといつてけつかる！」

で、一時も早くこの小づらの憎い侵入者を驅逐するために、

「おめえの世話にはなんねえぞーッ！」

と叫んだのであつた。彼等はもう、いはゆる親切は單に親切でないといふことを知つてゐる。

貧乏はどれほど辛いかを知り、その兩親へ對して生々しい愛情、一かたまりになつて敵に當らうとする一方の反抗心によつて强められた、切なる同情を感じてゐるのである。

朧氣ながら、眞の生活に觸れようとしてゐる彼等に比して、私の心は何といふ單純なことであらう！　何といふ臆病に、贅澤にふくれ上つてゐることであつたらう！

私はまちがつてゐたのだ。彼等總ての貧しい人々の群に對して、自分は誤つてゐた。

私は親切ではあつた。けれども幾分の自尊と彼等に對する侮蔑とを持つてゐたのである。そして、自分自身が彼等から離れ、遠のいた者であるのを思へば思ふほど一種の安心と誇り——極く極く小さな氣のつかないほどのものではあつたが——を感じてゐたといふことを僞れようか？

自分を彼等よりは立派だと思つたことは、ただの一度もなかつたか？

勿論、私は意識しながら傲慢な行爲をするほど愚かな心事を持つてゐるとは思はないけれども、長い間の習慣のやうになつて、理由のない卑下や丁寧を何でもなく見てゐたといふことは恐ろしい。

私共と彼等とは、生きるために作られた人間であるといふことに何の差があらう？

まして、我々が幾分なりとも、物質上の苦痛のない生活をなし得る、痛ましい基となつて、彼等は貧しく醜く生きてゐるのを思へばどうして侮ることが出來よう。

どうして彼等の疲れた眼ざしに高ぶつた瞥見を報い得よう！

私共は、彼等の正直な誠意ある同情者であらねばならなかつたのである。

世の中は不平等である。天才が現はれれば、より多くの白痴が生れなければならない。豐饒な一群を作らうには、より多くの群が饑餓の境にただよつて生き死にをしなければならないことは確かである。世が不平等であるからこそ——富者と貧者は合することの出來ない平行線であるからこそ、私共は彼等の同情者であらなければならない。

金持が出來る一方では氣の毒な貧乏人が出るのは、宇宙の力である。どれほど富み榮えてゐる者も、貧しい者に對して、尊大であるべき何の權利も持たないのである。

かやうにして、私は私自身に誓つた。

私は思ひ返した。

自分と彼等との間の、あの厭はしい溝は速くおほひ埋めて、美しい花園をきつと榮えさせて見せる！

四

私は、自分の生活の改革が、非常に必要であるのを感じた。そして、いろいろな思ひに滿たされながら、自分の今

日までの境遇を顧みたのである。

私共の先代は、此のK村の開拓者であつた。首都から百里以上も隔り、山々に取り圍まれた小村は、同じ福島縣に屬してゐる村落の中でも貧しい部に入つてゐる。

明治初年に、私共の祖父が自分の半生を捧げて、開墾したこの新開地は、諸國からの移住民で、一村を作られたのである。南の者も、北の者も新しく開けた土地といふ名に誘惑されて、幸福を夢想しながら、故國を去つて集つて來た。けれども、ここでも哀れな彼等は、思ふやうな成功が出來ないばかりか、前よりも、ひどい苦勞をしなければならなくなつても、そのときはもう年も取り、よそに移る勇氣も失せて仕方なし町の小作の一生を終るのである。それ故彼等は昔も今も相變らず貧しい。

そればかりか近頃では、小一里離れてゐるK町が、岩越線の分岐點となつてから、めつきり總ての有樣がちがつて來たので、この村も少からず影響を蒙つた。そして、だんだんと農民の心にしみ込んで來る、都會風の鋭い利害關係の念と彼等が子供の時分から持つてゐる種々の性癖が混合して、毎日の生活がより遽しく、滯りがちになつて來たのである。

村の狀態は決して工合が好いとはいへなかつた。長い間保つて來た狀態から、次の新しい狀態に移らうとする境の不調和が、全體を非常に貧しく落着かなくしてゐるのである。

けれども祖父はもう十七八年前に亡くなつて、ちやうど移住者もそろそろ村に落着いて來、生活が少しづつ樂になつたときの樣子ほか見てゐない。

彼は、大體に滿足して、村の高處に家を建て、自分等夫婦はそこに住んで、田地の世話を燒いたり、好きな詩を作つたりして世を終つた。

それで、後に殘つた祖母も、故人の志を守つて彼の遺した家に住み、田地を監視し、變遷する世から遠ざかつて暮してゐるのである。

一年中東京にゐた私は、夏になるとK村の祖母の家に行くのを習慣にしてゐた。そして、二月ほどの間東京では想像もつかないやうな生活をしてゐるのである。

私は村中の殆ど總ての者に知られてゐる。東京のお孃樣が來なすつたといつて、野菜だの果物だのを持つて來る者に對して、土產物を一つ一つ配つてやらなければならない。朝から小作男の愚痴を聞き、年貢米を負けてやる相談にのる。そして、かれこれいふのが面倒なので、さつさと祖母にすすめて許してやると、大變慈悲深い有難い者のやうに私共を賞めたてる。お世辭をいふ。

私は皆にちやほやされながら、朝夕二度の畑廻りをしたり、池の慈姑を掘つたり、持山を一日遊び廻つたり、すつかり地主の馬鹿なお孫さんの生活をしてゐた。誰からも、干渉がましいこと一ついはれず、存分に擴がつてゐたのである。

それでも私は尊さうにされてゐたことなどを思ふのは、今の私にとつてはまことに恥しい。我ながら厭になる。

何としてもどうにかして、村人の少しなりとも利益になる自分にしなければならない！

それで、私は心の裡に種々の計畫を立てた。そして、土地の開墾などといふことは——もちろんそこが人間の生活すべきところとして適當であり、また榮える希望もあるところならばよいけれども——冬が長く、地質も悪いやうなところへ、貧しい一群を作つたとしても、やはり非常に尊いことなのであらうかなどといふやうな疑問がしきりに起つたのである。

開拓者自身は、或る程度まで自分の希望を滿たし、喜ばされ、なほその村の歴史上の人物として稱揚されるけれども、はかない移住民として、彼の事業の最後の最も必要な條件を充たしてくれた、澤山の貧しい者共は、どのやうな報いを得てゐるか？

開墾者にとつてはゐなければならなかつた彼等でありながら、二十年近い今日まで彼等はただ同じやうに貧乏なだけである。年中貧しく忘れられて死んで行くだけである。

私は、祖父の時代からの澤山の貧しい者に對して、どうしても何かしなければならない。今日まで、すべきことは澤山あつたのに、臆病な自分が見ない振りをして來たのだといふやうな氣のすまなさが、農民に對する自分の心を、非常に謙讓なものにしたのである。

甚助の子が私にいたづらをした次の日であつた。平常より早く目を覺まし、畑地を一廻りして來た私は、ほのぼのと天地を包んでゐる薔薇色の靄や、裸の足の上に朝露をはね上げて生々としてゐる雜草の肌觸り、作物や樹木の朝明けの黨りなどに、どのくらゐ慰められたことであらう！

非常に愉快な心持ちになつて、女中に笑はれながら、大爐に焚火をしたり、いりもしない野菜を拔いて來たりしてゐると、東側の土間に一人の女が訪ねて來た。それは、甚助の女房であつた。

私に來てくれといふので、出て見ると、働き着て着て大變にボサボサな髪をした彼女は裸足で立つてゐる。

女は、私の顏を見ると、

「お早うござりやす。昨日は、はあ俺ら家の餓鬼共が飛んでもねえ御無禮を致しやしたさうでなえ。おわびに出やした。これ！　こけへ出てわびいふもんだぞ——」

と、いひながら手を後に伸ばすと、廣い背のかげから思ひがけず男の子が引き出された。

彼は默つて下を向いてゐる。赤面もせず、ウジウジもせず、ちつとも母親にたよるやうな樣子をしないでつくねんと立つてゐる。

女は、子供の方へ複雜な流し目をくれながら、しきりに繰返し繰返し勸辨してくれとか、自分等の子達は畜生同樣なのだから、どうぞこらしめにうんと擲つてやつてくれなどとまでいつた。

けれども私は、人にあまりあやまられたりすることは大嫌ひである。自分の前にすべてを投げ出したやうにしていろいろいはれると、しまひには、自分が恥しくなつて來る。何だか、いかにも自分が暴君じみてゐるやうに思はれて、いつも母のいふ「いくぢなしのお前」になり終せてしまふ。

今もその癖が出たとともに、もうどの子が何をしたとか憎らしいとかいふことは出來るだけ忘れようとつとめ、また實際氣にもならなくなつてゐるので、そんなにされることはよけいいやであつた。

で、私が口を酸くしてばくして叱るのをやめろといつても、彼女の方ではそれをあてこすりだと思つてゐるとみえて、だんだん子供にひどくする。

「食うてばかりけつかつてからに、碌なこと一しでかさねえ奴だら。これ！　わびしな。勘辨してやつとよ、何とかいひなてば」

と、子供の腕をつかんで、小突いたり何かしても、子供の方でもまた强情なだんまりを守つてゐる。

私には、甚助の女房がどんな心持ちでゐるかよくわかつた。わかつただけに、そんな謂はば芝居を見てゐるのは辛い。

私のいふことなどには耳もかさずに、怒鳴つてゐた彼女は、

「これ！　どうしたんだ？　う？　おわびしねえつむりなんけ？」

といふと、いきなり大きな掌で、頸骨が折れただらうと思ふほど急に子供の首を突き曲げた。

そして、

「どうぞ御免なして下さりやせ」

といふや否や、

「行つとれ！」

と叫んで突きとばした。

私は息がつまるくらゐびつくりしてしまつた。けれども、當の母親は滿足らしく笑ひながら小腰をかがめて、

「お暇潰れでござりやした」

と畑へ出て行つた。

下女は彼女の後姿を見送りながら、

「甚助さん家のおつかあは利口もんでやすなりえ、ちやんと先々のこと一考げえてる」

と嘲笑つた。

五

村の四辻に多勢人立ちがしてゐる。

子供等や、鍬を擔いだ男女、馬を牽いた他所村の者共まで、賤しい笑ひをたたへて口々に罵り騷いでゐる眞中には、兩手に魚を一切れづつ握つた男が、ニヤニヤしながら足を內輪にして立つてゐるのである。

肩の所に大きな鍵裂のある女物の着物を着て、細紐で止

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.